

保育者のマスク着用保育が乳幼児のアタッチメント形成に及ぼす影響

— 保育における「におい」に焦点を当てた考察 —

Effects of mask-wearing caregivers on infant attachment

- Focusing on odors in childcare -

七木田 方 美

NANAKIDA Masami

Abstract

I considered whether it is possible to form attachments for infants while the caregiver are wearing a mask.

In particular, we focused on nursery teachers wearing masks for “odor” and precaution of infection that I analyzed a questionnaire survey of 112 active nursery teachers in the 012-year-old class. As a result, the following three points were considered

(1) When we investigated whether childcare workers wearing a mask changed the reaction of infants, the number of childcare workers who felt that there was a “strong change” or “change” was higher than in the 2021 survey. Excluding childcare workers who were unable to notice any changes because they were wearing a mask from time to time, more than 95% of the childcare workers surveyed “felt negative changes in their infants”, such as “less responsiveness.”

(2) More than 40% of the childcare workers surveyed responded that they wanted their infants to remove their masks during childcare. Information was considered necessary in responsive engagement with infants.

(3) During childcare, it was found that the situations in which entrainment (resonant movements) between caregivers and infants tended to occur were eating, reading picture books, and assisting with excretion. Eating scenes and excretion scenes have a unique odor, and they are also scenes that create a “serve and return” between infants and caregivers. Both five senses are used in the responsive relationship between childcare workers and infants in childcare. In addition, it was considered necessary to recognize that infants are learning olfactory perception at the same time as visual and auditory perceptions.

I. 問題と目的

SDG'sは次世代を担う子どもたちが健やかに育ってこそ実現可能な目標である。現在、COVID-19パンデミックを心身の発達に最も著しい乳幼児が経験している。乳幼児を長時間預かる保育施設では、パンデミック当初から「乳幼児の発達支援」と「新しい生活様

式」という困難な両立を求められ続けている。

著者は保育者および保育への影響について、現役保育者を対象に、COVID-19パンデミック当初の2020年7月から12月と第5波直前の2021年7月から8月に、COVID-19パンデミックに伴う『新しい生活様式』によって保育者が乳幼児にどのような変化を感じているのかに調査研究を行った^{1) 2)}。この両調査におい

て、マスク着用保育により『排便のにおい』がわかりにくいという数人の保育者の自由記述があったこと、においに限らず、毎日繰り返される乳幼児へのケアが、即時的で応答的ではなくなっているという不安を感じていることを述べた³⁾。

保育において乳児が不快な状態にあるにおいは、排便のにおいだけでなく、吐乳や嘔吐のにおいも同様である。その一方で、乳児を抱いたときのおいに保育者が癒されたり、保育者が名前のない服の持ち主をにおいで判別したりと、においは保育者が日常の保育に幸せを感じる大切な感覚である。これらは、アタッチメントを形成するうえで重要な要因となる。

また、においはいつも保育の空間に存在している。乳幼児が絵具やクレヨンといった用具に初めて触れるとき、自然の中に身を置いたときなど、目に映る対象に手を伸ばして掴むという行為と同時に、対象のにおいに出会っているはずである。

そこで本研究では、保育者がマスクを着用した状態での保育（以降マスク着用保育）と「におい」に焦点をあて、保育者のマスク着用保育がアタッチメント形成に及ぼす影響について考察した。

なお、本文における「乳児」は、保育所等の0歳児クラスから2歳児クラスに所属する乳幼児を示す。「におい」の表記は「匂い」と「臭い」があり、一般的に「匂い」は快いにおいを、「臭い」は不快なおいを、「におい」はにおい全般を示すとされるため、先行研究に倣い本研究では「におい」と表記した^{4) 5)}。

II. 方法

1. 対象

調査対象は対面セミナーに参加した保育者であり、協力依頼に同意を得られた約150名を対象とした（正確な人数は不明）。期間は2022年6月と7月であり、日本においてCOVID-19第7波前であった。

2. 調査方法

調査は、ICTを用いたアンケートにより実施した。セミナーの内容がアンケート回答に反映されないよう、セミナーの最初に実施した。口頭及び調査用紙にて調査目的と回答は任意であることを説明した（調査1）。さらに、調査対象となったセミナー参加者のうち、継続参加が可能であった保育者を対象に2週間後に追跡調査を実施した（調査2）。

3. 調査内容

調査1：「におい」に関連する調査項目は、担当クラス、勤務年数、保育者のマスク着用と子どものよう

す、マスク着用保育における「便のにおい」への気づき、保育において乳幼児と保育者が気分を共有しやすい食事場面のマスク着用状況、そしてマスク着用保育と「におい」に関する自由記述であった。

調査2：調査1の2週間後、調査1を受け、保育における「におい」を意識したかどうか、「におい」を意識して気づいたことの2項目であった。

4. 分析の方法

質問項目ごとに基本統計量を求め、その結果を文献と照らし合わせて分析した。

III. 結果

1. 調査1

1) 調査対象

アンケートへの回答は124名であり、うち012歳児クラスに関わる保育者112名を分析の対象とした。内訳は、0歳児クラス38名（34.0%）、1歳児クラス37名（33.0%）、2歳児クラス24名（21.4%）、012歳の混合クラス2名（1.8%）、フリーで012歳児クラスを担当する保育者11名（9.8%）であった。勤続年数は1年～3年目30名（26.8%）、4年～10年目未満33名（29.4%）、10年目以上49名（43.8%）であった。

2) 保育者のマスク着用に伴う乳幼児の変化

長引くコロナ禍による保育者のマスク着用保育で、乳幼児の反応に変化があると感じているかどうかの結果は、「変化があると強く感じている」31名（27.7%）、「変化があると感じている」63名（56.2%）、「着任時よりマスク着用保育のためわからない」14名（12.5%）、「あまり変化は感じない・変化はない」2名（1.8%）、「その他」として「当たり前のようになっているように感じる」1名（0.9%）、未回答1名（0.9%）であり、「変化があると強く感じている」「変化があると感じている」をあわせると88.9%の保育者が保育者のマスク着用による乳幼児の変化を意識していた。（Table 1）

Table 1 マスク着用保育に伴う乳幼児の変化 (n = 112)

	人数	(%)
変化があると強く感じている	31	(27.7)
変化があると感じている	63	(56.2)
あまり変化はないと感じている	2	(1.8)
着任時よりマスク着用のためわからない	14	(12.5)
その他	1	(0.9)
未回答	1	(0.9)

・マスク着用保育とは保育者のマスク着用を指す
・乳幼児とは0～2歳児クラスに所属する乳幼児を示す

3) 保育者マスク着用保育による乳幼児の変化の内容

保育者のマスク着用保育による乳幼児の変化は、2020年度、2021年度の調査と同じ調査項目用いて調査した。その結果、「マスクを外して欲しそうにする」47名（42.0%）、「反応が乏しくなった」40名（35.7%）、「会話や表情による先生とのやりとりが長続きしない」37名（33.0%）、「絵本の読み聞かせ時の集中力が低下した」37名（33.0%）、「表情が乏しくなった」32名（28.6%）、「泣いて不快を訴えることが多くなった」12名（10.7%）、その他として「呼びかけに応じ辛くなった」「マスクで声がかもるため話が伝わりにくい」「滑舌の悪い子が増えた」「保育士の反応を見ながら話しをしてくる」「部屋が変わると先生かどうかが分かりづらいようだ」「0歳児にとってはマスクの保育者が当たり前で、表情を目元や声からしかキャッチできていない」「マスクに手を伸ばす」という回答があった。（Table 2）

4) 保育者のマスク着用と乳幼児の便のにおい

保育者のマスク着用保育により便のにおいに関する気づきにくくなったかという問いには、「とてもそう思う」19名（17.0%）、「そう思う」54名（48.2%）、「あまりそう思わない」2名（1.8%）、「そう思わない／変わらない」10名（8.9%）、「着任時よりマスク着用のためわからない」24名（21.4%）、未回答が3名（2.7%）であり、「とてもそう思う」「そう思う」をあわせると65.2%の保育者がマスク着用保育により、乳幼児の排せつ（大便）のにおいに関する気づきにくくなったと回答した。（Table 3）

(1) においを感じやすい授乳場面

「マスクをしたまま授乳し、しっかりと声をかけている」70名（62.5%）、「マスクをしたまま授乳し、声もあまりかけない」8名（7.1%）「授乳なし（授乳が必要な子どもがいない）」15名（%）、「マスクを外して授乳し、しっかりと声をかけている」「マスクを外して授乳し、声をかけないようにしている」は共に0人（0.0%）、未回答は19名（17.0%）であった。

（Table 4）

(2) においを感じやすい離乳食場面

においを感じやすい食事場面での保育者の姿は、「離乳食時も基本的にマスク着用している」68名（60.7%）、「離乳食時は、口元を必要な時に見せている」31名（27.7%）、「透明マスクをしている」1名（0.9%）、「その他」4名（3.6%）、「未回答」8名（7.1%）であり、「離乳食時は、口元をずっと見せている」は0名（0.0%）、であった。（Table 5）

Table 2 マスク着用保育による乳幼児の具体的内容

	(n = 112)	
	人数	(%)
マスクを外して欲しそうにする	47	(42.0)
反応が乏しくなった	40	(35.7)
会話や表情によるやりとりが長続きしない	37	(33.0)
絵本の読み聞かせ時の集中力低下	37	(33.0)
表情が乏しくなった	32	(28.6)
泣いて不快を訴えることが多くなった	12	(10.7)

・マスク着用保育とは保育者のマスク着用を指す
 ・乳幼児とは0～2歳児クラスに所属する乳幼児を示す
 ・複数回答可であり、「その他」の自由回答として、「呼びかけに応じ辛くなった」「マスクで声がかもるため、話が伝わりにくい」「滑舌の悪い子が増えた」「保育士の反応を見ながら話しをしてくる」「部屋が変わると先生かどうかが分かりづらいようだ」「0歳児にとっては、マスクの保育者が当たり前で、表情を目元や声からしかキャッチできていない」「マスクに手を伸ばす」という記述があった。

Table 3 マスク着用保育により乳幼児*の便のにおいに関する気づきにくくなった

	(n = 112)	
	人数	(%)
とてもそう思う	19	(17.0)
そう思う	54	(48.2)
あまりそう思わない	2	(1.8)
そう思わない 変わらない	10	(8.9)
012歳児クラス着任時よりマスク着用のためわからない	24	(21.4)
未回答	3	(2.7)

・マスク着用保育とは保育者のマスク着用を指す
 ・乳幼児とは0～2歳児クラスに所属する乳幼児を示す

Table 4 においを感じやすい授乳場面での保育者の姿

	(n = 112)	
	人数	(%)
マスク着用のまま、しっかりと声をかけている	70	(62.5)
マスク着用のまま、声もあまりかけないようにしている	8	(7.1)
マスクを外して授乳し、しっかりと声をかけている	0	(0.0)
マスクを外して授乳し、声をかけないようにしている	0	(0.0)
授乳なし	15	(13.4)
未回答	19	(17.0)

Table 5 においを感じやすい食事時の保育者の姿

	(n = 112)	
	人数	(%)
基本的にマスク着用のままである	68	(60.7)
必要な時にマスクをずらす	31	(27.7)
透明マスクをしている	1	(0.9)
その他	4	(3.6)
未回答	8	(7.1)

2. 調査2

1) 調査対象

調査①の2週間後のセミナーに参加した52名中、012歳に関わる保育者45名を分析対象とした。内訳は0歳児クラス4名(8.9%)、1歳児クラス17名(37.8%)、2歳児クラス14名(31.1%)、012歳の混合クラス1名(1.9%)であり、3歳以上児クラス7名(13.5%)であった。

2) 調査1から2週間後時点の保育における「におい」

への意識

調査1から2週間後に、乳児の保育において「におい」を意識できたかどうかについて尋ねたところ、「意識できた」26名(57.8%)、「意識できなかった」18名(40.0%)、その他1名(2.2%)であった。(Table 6)

3) 意識した「におい」

調査1後の2週間の間に、マスク着用保育と「におい」に関して気付いたことについて尋ねたところ45名中24名(53.3%)の記述を得た。内容はTable 7に示した。

においを意識できたという保育者26名中16名(61.5%)に「排せつに関する記述」が見られた。

他に「給食」のにおい、「葉っぱ」「野菜」「雨」などの自然のにおい、「服」や「エアコン」など、草木等の自然のにおいや保育室内のにおいに関する記述があった。

マスク着用保育により便のにおいに気付いていな

Table 6 第1回調査後の2週間に保育における「におい」を意識したか (n = 45)

	人数	(%)
意識できた	26	(57.8)
意識できなかった	18	(40.0)
その他	1	(2.2)

第1回調査の2週間後に保育における「におい」を意識したかどうかを調査した。分析対象は0~2歳児クラスの保育に携わる保育者とした。

かった、もしくはマスクを外してみても便のにおいによりやく気づいたという自由記述が多い中、「オムツが重たそうに見えた」(No.3)、「不機嫌になったり保育者へしぐさで教えてくれている気がする」(No.13)、「行動やしぐさの反応で見ていた」(No.14)など、嗅覚以外の感覚を頼りにしていたという記述もあった。

また「マスクをする前に比べ、やっぱりマスクをするようになってから匂いを感じにくくなってたと実感した」(No.19)、「マスクをしていると色んなにおいに気付きにくい。安全面でもにおいは大切なのだと思う」(No.19, 25)、「嗅覚も頼りにしながら保育したり、子どもの変化にいち早く気付いていたことを再認識した」(No.26)など、保育者自身の嗅覚への気づきに関する記述もあった。

4) エンタテインメントが生じやすい保育場面

他者との関係をより強くする時間をクオリティタイムという。保育においてクオリティタイムとなるエン

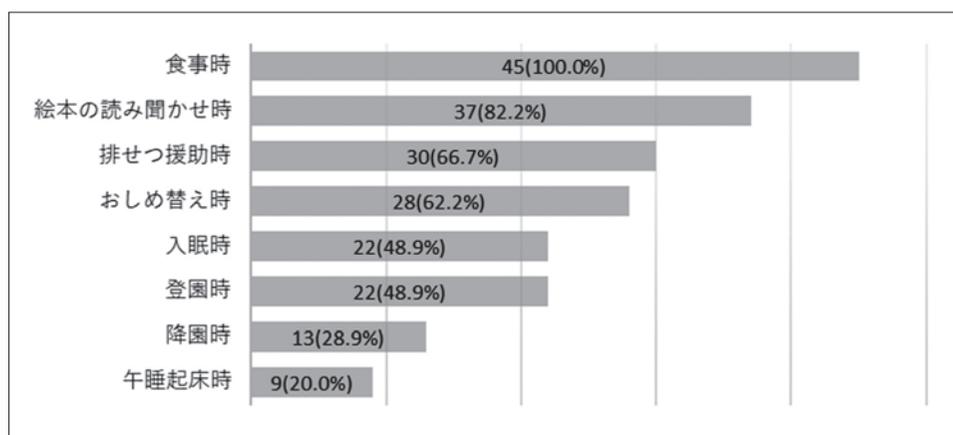


Figure 1 エンタテインメントを実感しやすい保育場面

第1回調査から2週間後の第2回目のセミナーに継続して参加可能であった52名中、012歳の保育に携わる現役保育士45名に対し、登園から降園までの主要場面を提示し、エンタテインメントを感じやすい場面を尋ねた。

回答は複数回答可能とした。

保育者のマスク着用保育が乳幼児のアタッチメント形成に及ぼす影響の考察

トレーニング（共鳴動作・シンクロシティ）が生じやすい場面を尋ねたところ、食事時45名（100.0%）、絵本の読み聞かせ時37名（82.2%）、排泄・排尿援助時30名（66.6%）、おしめ替え時28名（62.2%）、登園時22名（48.9%）、入眠時22名（48.9%）、降園時13名（28.9%）、午睡起床時9名（20.0%）であった（Figure 1）。

続いて「保育者自身が012歳児とエントレインメントを感じる場面」について、自由記述で回答を求めたところ、45名中44名の回答があった（Table 7）。エントレインメントを感じやすい場面は太字で示した。「抱っこ」等の保育者との身体的な「ふれあい」に関する記述は斜体で示した（No.12, 23, 24, 29, 32, 34, 37, 38, 39, 40, 43）。

Table 7 2週間の間に気付いたマスク保育におけるのにおいに関すること

NO.	記述内容
1	マスクをしていることでオムツ替えの時の匂いはもちろん、給食のいい匂いや花や草の自然の香りも感じにくくなる。
2	給食の匂いが分かりづらい。雨の匂いを感じれない。うんちが出たことに気が付きにくい。
3	排便時。オムツが重たそうに見えたので確認したら、排便していることに気づけなかったが、給食のにおいなどは感じる事ができた。
4	エアコンの匂いやうんちが出たときの匂い、または園で育てている野菜の匂いに気づくことが出来た
5	オムツ交換の際にマスクを外してみたら、子どもの排泄物のにおいがわかった。
6	マスクを外した時のほうが、排便の匂いだけでなくオムツの中での排尿の匂いも分かった。
7	マスクをしていても匂いに焦点を当てるようにすると、排便の匂いに気付けるようになった。
8	排便のにおい気づきにくいと感じた。他の職員との連携も必要だと感じた。
9	やはりうんちの匂いに気が付きにくいため、おむつの中でカピカピになっていることもあった。
10	マスクを室内で外すことで、便のにおいに、気づきました。
11	給食中にうんちをしており漏れていたが臭いがわからず、着替えさせる時に気がついた
12	うんちのにおい、給食のにおい。
13	便のにおいがきつい時は気づけるが、きつくない時には排泄のタイミングにならないと便が出ていることに気づけないことが分かった。子どもの表情をよく見ていると、1歳児の子は便が出た時には不機嫌になったり保育者へしぐさなどで教えてくれている気がした。
14	便のにおいに気づくまでに時間がかかり、行動や仕草の反応で見ていた事に気がついた
15	1人ひとりの服のにおいや便のにおい
16	排泄物が紙パンツに残っていることは気持ち悪いことの再認識ができた。子どもの排泄を気にするようになった。
17	マスクをする前に比べてやっぱりマスクをするようになってから匂いを感じにくくなっていたなと実感した
18	マスクを外すと子どもが葉っぱのにおいを感じたり、雨のにおいを感じた時に共感することが出来た。
19	マスクをしていると、色んなにおいに気が付きにくい。安全面でもにおいは大切なんだと思います。
20	雨のにおいがあることは経験上わかっているが、マスクをしていると感じない自分がいる
21	においの共有があまりできていないことに気づいた。
22	時々マスクを浮かせたり、意識してにおいを嗅ぐようにした。
23	いろんな匂いに気づけてなかったことを改めて感じた。
24	マスクをしていない頃は、嗅覚も頼りにしながら、保育したり、子どもの変化にいち早く気付いていたことを再認識した。

Table 8 012歳児とエントレインメントを感じる場面

NO.	記 述 内 容
1	子どもに <u>ご飯</u> を食べさせるとき、自分もお口を開けてしまうとき。
2	普段表情がないと言われていた学生が笑顔で大きな口をあけ、小さい子に <u>ごはん</u> を食べさせてあげていたとき。
3	<u>ご飯</u> を食べている時。口元に持って行き、あーんというと一緒にになってあーんと口を開けて食べ、美味しいねにこっと笑一緒に笑う時。
4	<u>食事</u> の時に、苦手なものを食べる時。 <u>トイレ</u> で排尿することができた時。絵本で保育士が言ったことや仕草を真似してくれる時。
5	<u>ご飯</u> を食べる時に一緒に口を開けて「おいしいね」と微笑み合う時。
6	<u>ご飯</u> がおいしくて顔を見合わせて笑顔になる時。
7	側で見守りながら <u>給食</u> を食べている時に嫌いな物は顔をしかめ、一口食べられた時は笑顔になり食べられた喜びを共に味わう事ができた。
8	<u>食事中</u> にかみかみもぐもぐして食べようねと「かみかみもぐもぐ」と言っているときと「かみかみもぐもぐ」と言いながら食べる子どもたち。
9	<u>食事</u> の援助の際に保育者も子どもと同じように口を動かしたりして子どもの今その時と繋がれたとき。登園時涙が出る時に悲しいね～お母さんがいいよね～と共感しながら受け止めながら抱っこすると子どもも少し落ち着いたとき。
10	<u>食事</u> のときに自分でフォークやスプーンを持って食べたときにすごいねなどの声かけをした時。
11	<u>食事中</u> や、遊んでいるときに目があい、その後も子どもが保育者の方を気にしつつ、同じ時間を共に過ごしたときなど。
12	<u>離乳食</u> で同じように口を動かす時、 <u>授乳時</u> に <u>目を見合</u> わせている時、 <u>口元をみてくれて飲む時</u> 、 <u>オムツ替えの時</u> 、 <u>着替</u> えの時に体を自ら動かしてくれる時、手遊びで表情や動きに合わせて楽しむ時、 <u>絵本</u> でのやり取り、ごっこ遊びでよくみて真似をしながらやり取りを楽しむ時など
13	ままごと遊びをしている際、子どもが食べる真似をして保育者が「おいしい！」と言うと子どもも「おいしい！」と笑顔で言ったとき。登園時「おはよう」と手を振ると子どもも手を振ったとき。 <u>絵本</u> と一緒に読んだ際、子どもも覚えていて絵本の内容と一緒に読んだとき。
14	<u>絵本</u> を読む時子供の反応と同じ反応をしているとき。
15	<u>絵本</u> を読んでいる時、場面ごとに表情や声を変えていると、子ども達の表情も変わっていくところ。
16	<u>絵本</u> の読み聞かせの際、一緒に楽しむ表情や悲しんだ表情をしている。
17	<u>絵本</u> を見ている時。同じところでニコニコ笑ったり、声を出したり、表情が同じになる。
18	<u>絵本</u> を読んでいる時、体を左右に振ったりなどの仕草と一緒にするとき。
19	<u>絵本</u> を読んでいる時。子どもと一緒にワクワクしたり、声や表情をマネをしたりして笑い合える。
20	<u>絵本</u> の読み聞かせで、おぼけなど怖そうに静かにゆっくり読むと、子どもも同じように静かなトーンで話したり表情をこわばらせたりする。
21	<u>オムツ替え</u> の時。
22	<u>排尿</u> や <u>排便</u> の際子どもと向き合って座り、一緒に力を入れたり、スッキリした表情をしたり、できたら一緒に手を合わせて喜んだりするとき。
23	朝のおはようで <u>手を指し出し合い抱きしめる瞬間</u> 。眠たい時のあくび。 <u>絵本</u> で面白いとき、びっくりした時。水あそびの冷たいね～な時。
24	手遊び、歌と一緒に踊っている。 <u>絵本</u> を読んで欲しいとき <u>膝に座</u> ってるとき。
25	目が合ったら笑ったら笑い返してくれた時。
26	目と目を合わせて様々な会話し、共感すること。
27	遊び。かけっこや砂遊びなど同じ遊びをする中で一緒にして楽しかったことが共有できる。
28	積み木で遊んでいる際、一緒に積み重ねて行く時。
29	向かい合って <u>身体や顔を触</u> ったりしてスキンシップを図って、 <u>お互いに声を出し合</u> ったり笑いあったりしたとき。
30	<u>絵本</u> の読み聞かせ中に楽しい場面で子どもと一緒に笑う時。
31	だるまさんがころんだの <u>絵本</u> で自然とお互いに揺れたり、目が合わせて笑うとき。
32	<u>0歳児の手に手を添</u> えてやっとなかまを添えている時、一緒にになって笑って歩いています。
33	車の玩具（後ろに引いて走るもの）で保育士の真似をして、子どもが自分で車を引いて車が進んだ時。保育士も子どもも拍手して喜んだ。
34	<u>何気ないふれあい遊び</u> から、2人だけのツボがあって、大笑いしているとき。心のダンス（エントレインメント）できているのかなと思う。
35	朝の会で歌を歌っている時。私のピアノの伴奏で一生懸命カエルの歌が～♪と歌ってくれているのを見ると私も笑顔で歌って楽しくなる。
36	戸外で虫を見つけたり観察してるとき
37	子どもの方から <u>膝に座</u> りに来た時。 <u>ギュッと抱</u> いてあげた時とても可愛い表情をしてくれます。
38	<u>登園時</u> に抱きついてくる時。転んで泣いて探しに来てくれる時。製作物を嬉しそうに持っている時。おまる排泄成功にしてハイタッチする時。
39	好きな遊びの時間。「いない、いない、ばあ」遊びのとき。 <u>触れ合い遊び</u> のとき。
40	午睡時、 <u>大人の息遣</u> い、 <u>まぶたの動き</u> に合わせてさらに子どもも眠くなる。ほとんど同時に子どもも大人も入眠していることがよくある。
41	お絵描きなど、身体を使って楽しそうに動いている時。
42	子どもと遊んでいて作っていたものが途中で崩れた時。泣きそうな顔も、私が残念そうにしながらも面白そうに笑と子どもも笑顔になった。
43	<u>触れ合い遊び</u> で微笑んだときに微笑み返してくれたとき。
44	一緒に遊んでいる時。

IV. 考 察

乳児のアタッチメント形成は、保育者等の養育者の日常のケアの繰り返しにより形成される。乳児期の情動は快—不快であり、乳児の不快を快へと導くのは特定の保育者であることが望ましく、平成30年（2020）3月施行の保育所保育指針においても、乳児期の著しい感覚の発達を考慮した特定の人との愛情豊かな応答的な関わりが必要とされている⁶⁾。応答的な関わりとは保育者と乳児の双方向性の関わりのことである。ユニセフの紹介動画では『サーブ&リターン』と名付けられている⁷⁾。

1. 保育者のマスク着用と乳幼児との応答的な関わり

本調査では、就任時からマスク着用保育である保育者は14名12.5%であり、前年度（2021年）調査⁸⁾の11.7%と比較すると1.2ポイント増加した。COVID-19流行が長期化する中、マスク未着用時の保育を知らず、マスク着用保育の功罪を意識できない保育者が今後も増加することが予測される。また、マスク着用保育によって乳幼児の反応に変化があると感じている保育者が8割を超えたが、母数から「着任時よりマスク着用保育のため変化が分からない」という保育者14名を除くと、乳幼児に変化があると感じている保育者は95.9%に上った。この値は前年度調査⁹⁾の68.7%より27.2ポイント高い値であった。

乳幼児の反応が乏しくなっていることや集中力の低下、不快を泣いて訴えることの増加などの危惧は、COVID-19パンデミックにおけるマスク着用保育だけが要因とは言えないが、4割を超える保育者が「（乳幼児が）マスクを外して欲しそうにする」と回答したことから、口元を含むマスクで隠れている顔の部分から乳幼児が受け取る情報があり、それは乳児との応答的な関わりにおいて必要な情報であると考えられる。

2. 保育者が感じ取る乳幼児の排便のにおいとおむつ替え

保育者による乳児への接触は、「情愛的接触（抱く、撫でる、持続的に接触しているなど）」「道具的接触（拭く、道具を持たせるなど）」「刺激的接触（つつく、ゆするなど）」に分けられ、乳児の学習動機を高め、主体的な行動を引き出すのは、「情愛的接触」経験だとされている¹⁰⁾。また、7か月の乳児は他者に身体を触れられながら声を聞くことにより、初期の認知発達が促進されることも明らかになっている¹¹⁾。

排便による不快を保育者によって取り除かれ快になるという保育の営みは、乳幼児が同じ人から同じタイミングで繰り返しケアを受けながら声をかけられ、触れられ、快適になるという場面であり、排泄援助は単なる「道具的接触」ではなく、保育所保育指針で求められる愛情豊かで応答的な「情愛的接触」の時間といえる¹²⁾。

本研究において、マスク着用保育により、6割を超える保育者が乳幼児の便の匂いに気付きにくいと感じており、不快から快に導くためのおむつ交換のタイミングが一定せず、乳幼児の人への基本的信頼感が育まれにくい状況にあると推測される。さらに、乳幼児が身体を触れられながら語り掛けられる「情愛的接触」としてのおむつ交換場面が、マスク着用保育により、乳幼児は保育者からの語り掛けを視覚的に捉えられず、語り掛けられているという実感が持ちにくくなるため、単なる「道具的接触」の時間となっている可能性がある。したがって、マスク着用保育はアタッチメント形成を阻害すると考えられる。

3. マスク着用保育と乳幼児の嗅覚情報の認識

保育者に保育場面の「におい」情報に意識を向けるよう問いかたところ、保育者は、「排せつ」に関するにおいだけでなく、「給食」のにおい、「葉っぱ」「野菜」「雨」などの自然のにおい、「服」や「エアコン」など、草木等の自然のにおいや保育室内のにおいなどに、保育場面に様々なにおいがあることに気付いた。そしてマスクが様々なにおいを遮っていることにも気づき、保育におけるにおい情報は、今まで意識していなかったが、乳幼児の安全や健康状態把握に必要な情報であったと気付いた保育者がいた。

胎児期から幼児期の嗅覚の発達に関する先行文献によると、嗅覚は胎児期には五感の中では触覚（体性感覚）に次ぐ早さで発生していることが知られている¹³⁾。胎児は、羊水を介して「母親のにおい」に接し、生後は母親の羊水のにおいを好み¹⁴⁾、生後3-4日では母親の羊水のにおいよりも自然な母親の胸のにおい好むようになる。この変化は体験によるものと推察されている¹⁵⁾。さらに母乳を飲んでいる生後約2週間の新生児は、母親の腋のにおいを弁別することが可能であり、母乳を飲む子どもは授乳中の母親のにおいに曝されて、そのにおいに急速に慣れ親しむためと考えられている¹⁶⁾。また乳児は母乳を介して母親の食の嗜好の影響を受けることも知られている¹⁷⁾。

このように、嗅覚は誕生前から機能しているだけでなく、乳児は生後直後の授乳やだっここの体験により

「におい」を学習し、特定の人とのアタッチメント（ボンディング）を形成する。したがって、保育におけるさまざまな「におい」も保育者とのかかわりの中でその良し悪しを学習すると推測できる。

4. 保育者と乳幼児の嗅覚情報の共有

においが人の精神活動に直接与える影響の大きさは計り知れず、嫌なにおいはあらゆる精神活動の邪魔となり、好きなにおいは気分を高揚させるものである¹⁸⁾。しかしながら保育活動におけるにおいの認識は、歴史的な教育思想家であるルソーは著書『エミール』の中で乳幼児は観念と結びつけることができないため嗅覚が鋭敏に機能せず、嗅覚は想像力の特徴であるとしていた¹⁹⁾。またモンテッソーリは乳幼児の嗅覚はあまり発達しておらず、食事の時間に感覚が獲得されるとし、嗅覚によって乳幼児の注意を引くことは困難であるとしていた²⁰⁾。この誤解は、嗅覚情報が視覚情報や聴覚情報ほどには意識されにくいものであるり、嗅覚やにおいに関するメカニズムは未だ十分に解明されていない領域であったためである²¹⁾。

そして、2, 3, 4歳児のにおいの知覚は大人にとってのにおいの良し悪しと同様ではない。排泄物や汗のにおいを不快には感じていないが、5歳になると劇的に変わり、排泄物や汗のにおいを激しく不快なものとして反応するようになるということ明らかになっている²²⁾。

近年の味嗅覚研究では、保育におけるにおいを乳幼児は感じ取っており、嗅覚で感じとったにおいを快—不快と判断するには文脈的な要因が影響しているということもわかっている²³⁾。

本研究において、エントレインメント（共鳴動作）が生じやすい場면을保育者に尋ねたところ、食事場面、絵本の読み聞かせ場面、排泄援助の場面であることがわかった。エントレインメントは、親しい人との間でリラックスしている陽性感情の場面で生じるものである²⁴⁾ ²⁵⁾。食事場面や排せつ場面は場面特有のにおいがあり、乳幼児と保育者との『サーブ&リターン』を創造する場面でもある。乳幼児が視知覚や聴知覚と同時に嗅知覚の学習もしていることを保育者は認識し、マスク着用保育で奪われている乳幼児の学習の機会を補えるよう、意識した応答的なかかわりの工夫が必要であると考えられる。

V. まとめ（結論にかえて）

保育者のマスク着用保育がアタッチメント形成に及ぼす影響について「におい」に焦点を当てて考察し

た。その結果、以下の3点が考察された。

- ① 保育者のマスク着用保育が乳幼児の反応に変化があるかどうかについて調査したところ、「変化が強くある」「変化がある」と感じている保育者は、2021年度の調査よりも高く、就任時よりマスク着用保育のため変化が分からないという保育者を除くと調査対象の95%を超える保育者が「反応が乏しくなった」などのネガティブな変化を乳幼児に感じていた。
- ② 調査対象の4割を超える保育者が、保育中に乳幼児がマスクを外して欲しそうにすると回答したことから、口元を含むマスクで隠れている顔の部分から乳幼児が受け取る情報があり、その情報は乳児との応答的な関わりにおいて必要な情報であると考えられた。
- ③ 保育中に保育者と乳幼児がエントレインメント（共鳴動作）を生じやすい場面は、食事場面、絵本の読み聞かせ場面、排泄援助時であることがわかった。食事場面や排せつ場面は場面特有のにおいがあり、乳幼児と保育者との『サーブ&リターン』を創造する場面でもある。保育における保育者と乳幼児との応答的なかかわり場面では、双方が五感を働かせている。また、乳幼児が視知覚や聴知覚と同時に嗅知覚の学習もしていることを認識して保育をする必要があると考えられた。

謝辞

本研究の実施にあたり、多大なご協力を頂きました関係者各位に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 七木田方美. 保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響—COVID-19禍による. 保育と保健. 2021; 27 (2) : 13-17.
- 2) 七木田方美. 「新しい生活様式」における保育施設での乳幼児の変化—COVID-19感染拡大第5波直前の現役保育士への調査の考察—. 比治山大学短期大学部紀要. 2022; 57 : 17-26.
- 3) 七木田方美. 「新しい生活様式」における保育施設での乳幼児の変化—COVID-19感染拡大第5波直前の現役保育士への調査の考察—. 比治山大学短期大学部紀要. 2022; 57 : 17-26
- 4) 綾部早穂・小早川達・斉藤幸子. 2歳児のニオイの選好—バラの香りとスカトールのニオイのどちらが

- 好き? - 感情心理学研究. 2003; 10 (1) : 25-33
- 5) 綾部早穂. においの快不快感に及ぼす言語ラベルの影響. AROMA RESERCH. 2001; 2 (2) : 159-163
- 6) 厚生労働省 (編). 保育所保育指針解説. 東京: フレーベル館, 2018: 89-90
- 7) Building babies' brains through play: Mini Parenting Master Class. Tips on how to boost your baby's brain development. <https://www.unicef.org/parenting/child-development/building-babies-brains-through-play-class>
- 8) 七木田方美. 「新しい生活様式」における保育施設での乳幼児の変化—COVID-19感染拡大第5波直前の現役保育士への調査の考察—. 比治山大学短期大学部紀要. 2022; 57 : 17-26
- 9) 七木田方美. 「新しい生活様式」における保育施設での乳幼児の変化—COVID-19感染拡大第5波直前の現役保育士への調査の考察—. 比治山大学短期大学部紀要. 2022; 57 : 17-26
- 10) 明和政子. ヒトの発達の謎を解く. 東京: 筑摩書房, 2019: 75-107
- 11) Yukari Tanaka・Yasuhiro Kanakogi・Masahiro Kawasaki・Masako Myowa. The integration of audio-tactile information is modulated by multimodal social interaction with physical contact in infancy. 「乳児期の身体接触を伴うマルチモーダル相互作用経験によって, 乳児の触—聴覚情報の統合が調整される」. Developmental Cognitive Neuroscience. 2017
- 12) 厚生労働省 (編). 保育所保育指針解説. 東京: フレーベル館, 2018: 97
- 13) Vaucoair, J.. *Development du jeunr enfant Motricite, perception, cognition*. Paris: Belin, 2004. ヴォークレール, J. 明和政子監訳, 鈴木光太郎訳. 乳幼児の発達—運動・知覚・認知. 東京: 新曜社, 2012: 101-102
- 14) Schaa, B., Marlier, L.. Human fetuses learn odours from their pregnant mothr's diet. Chemical Senses, 2000; 25 : 729-739. 齊藤幸子, 小早川達. 未嗅覚の科学 人の受容体遺伝子から製品設計まで. 東京: 朝倉書店, 2018: 8-35
- 15) Marlier, L., Schaal, B., Soussignan, R. Orientation responses to biological odors in the human newborn. Initial pattern and postnatal plasticity. *Comptes rends de l'Academie des Sciences*, III, 320, 999-1005. 齊藤幸子, 小早川達. 未嗅覚の科学 人の受容体遺伝子から製品設計まで. 東京: 朝倉書店, 2018: 136-141
- 16) Cernoch, J.M., Porter, R.H. Recognition of maternal axillary odors by infants. Child Development, 1985; 56 (6) : 1593-1598. 齊藤幸子, 小早川達. 未嗅覚の科学 人の受容体遺伝子から製品設計まで. 東京: 朝倉書店, 2018: 136-141
- 17) Lennart, N., Lars, H.. A Child is born. USA: Delta, 2003: 141
- 18) 山内照雄, 鮎川武二. 感覚の地図帳 The Atlas of Human Sense. 東京: 講談社, 2007: 74
- 19) ルソー. 今野一雄訳. エミール (上). 東京: 岩波書店, 1962: 347-350
- 20) モンテッソーリ. 阿部真美子訳. モンテッソーリ・メソッド. 東京: 明治図書, 1974: 150-151
- 21) 山内照雄, 鮎川武二. 感覚の地図帳 The Atlas of Human Sense. 東京: 講談社, 2007: 66-75
- 22) デズモンド・モリス. 今福道夫訳. 子どもの心と身体図. 東京: 終風舎, 2010: 82-84
- 23) 齊藤幸子, 小早川達. 未嗅覚の科学 人の受容体遺伝子から製品設計まで. 東京: 朝倉書店, 2018: 8-35
- 24) 七木田方美. エントレインメント. 和顔愛語 (比治山大学短期大学部幼児教育研究会). 2018; 47 : 15-16
- 25) 七木田方美. エントレインメントは身体が整うことにより表彰される「心のダンス」. 和顔愛語 (比治山大学短期大学部幼児教育研究会). 2021; 49 : 1-5

〈キーワード〉

アタッチメント マスク におい covid-19
乳児保育

七木田方美 (幼児教育科)
(受理 2022年10月31日)